

カルチャー・ショック

日本人の見た外国



紙幣カウンター機能付の偽札鑑定機が現在では普及しており、鑑定機能のみのものはあまり目にしなくなりました。例えば100元札1枚で買物をして、数える必要はないにもかかわらず、このような大きな機械にお札を通して（森永正裕氏写真提供）

最初には偽札に対するリスク管理について述べる。上海では小さな店ほど札を透かして見る小型の機器が置いてある。支

中国のリスク管理について幾つかのエピソードを紹介して、日本人のリスク管理に対する関心を高めたいと思う。

筆者は、二年ほど前に一年ばかり上海に滞在した。その体験から①偽札に対するリスク管理、②博物館などのレプリカの展示、③印鑑のリスク管理について述べてみたい。

日本では、リスクの無いのが当然で、何か問題が発生したら、偶然不幸に出会ったものという認識が一般的である。しかし、上海ではリスク管理ができていなかったたで問題が発生したという考え方が一般的であった。もちろん問題が発生しないほうが良いことは明らかであるが、管理して問題が起るのと、管理しないで問題が起ることに違いがある。グローバルゼ

払いに札を出すと、まずは、手で触って確認し、電灯で透かして確認し、最後に専用の機器で透かして確認する。少なくとも三回は確認作業を行って受け取る。ちなみに一体どこを確認しているのかと尋ねると、丁寧の確認場所を数カ所（四カ所以上ある）教えてくれた。道端で商売をする人は、小型の確認機器がないので驚くほど入念にチェックし、それもまた面白いものである。

次に、上海博物館のレプリカの展示について述べる。上海博物館では、英国のビクトリア・アルバート・ミュージアムに展示してあるような大きなみことな壺などの作品が無造作に展示してある。博物館の入り口には「これらは皆レプリカである」と断り書きがついている。もし地震などで展示品が破損したとしても、レプリカなので問題は無い。これなどは地震王国の日本は、大いに学ぶべきことであろうと思った。日本の地震で国宝級の仏像などが破損し、修復の予算が無いことなどが報道されると、筆者はいつも上海の博物館にリスク管理を学ぶべきであると思うのである。念のため付け加えるなら、上海には、ここ一〇年くらいほとんど地震が無いので、レプリカの展示が地震対策ばかりではなく、盗難にも備えていることは言うまでもない。

「ペーパー王国」のリスク管理について

水野順子

最後に印鑑について述べる。日本では印鑑王国で銀行の通帳をはじめ何にでも印鑑を押す。しかし、中国の銀行預金通帳には印鑑が必要でなかった。これは、意外であった。印鑑はもっと重要なことに使用し、滅多に使用するものではなかった。中国は基本的にサインで用事を済ますことのほうが多い。筆者が、北京のホテルに宿泊した時のことである。当該ホテルに宿泊したことを証明する宿泊証明書を出して欲しいとフロントにお願いすると、フロントは快く証明書を発行してくれた。しかし、その証明書に押印がなかった。筆者は押印した証明書が必要であると要求した。すると一旦奥に相談に行った担当者は、戻って来ると押印したものは出せないと答えた。なぜなら押印した書類を渡して、それを受け取った人がもしも落したり、紛失したりすれば、その書類を拾った人が、印影から印鑑を偽造して使う恐れがあるからである、と説明してくれた。筆者はその用心深さに感心するとともに、中国の印鑑とは日本という実印に相当するもので、非常に重いものなので、滅多に外向けに使用するものではないということを知った。

（みずの じゅんこ／アジア経済研究所
新領域研究センター）